

ドレスデン国立歌劇場 ゼンパーオーパー

Sächsische Staatsoper Dresden Semperoper

ドレスデン国立歌劇場<ゼンパーオーパー>の歴史と展望

岡本 稔 (音楽評論家)

Minoru Okamoto

● 宮廷楽団の誕生から最初のオペラ・ハウスへ

ドレスデン国立歌劇場のオーケストラ、シュターツカペレ・ドレスデンは 1548 年に創立された宮廷楽団を起源とする世界で最も古いオーケストラのひとつ。1547 年に選帝侯となったモーリツ公は、8 名か 9 名のトランペット奏者とティンパニという編成の楽隊を結成した。一方、19 人の歌手とオルガニストという構成の宮廷聖歌隊も組織されており、1606 年には 47 人の歌手とヴァイオリン、ヴィオラ・ダ・ガンバ、フルート、ショーム、ホルン、クルムホルン、ダルシアン、コルネット、トランペット、トロンボーン、太鼓、リュート、オルガンといった編成のオーケストラに発展した。この二つの流れを受け継ぐのがシュターツカペレ・ドレスデンである。

ドレスデンの宮廷楽団が誕生してほぼ半世紀後の 1597 年に新しい芸術ジャンルが産声をあげる。イタリア、フィレンツェのバルディ伯爵の宮廷で史上初のオペラ《ダフネ》が上演されたのである。それは程なくイタリア全土に広がり、ドレスデンの宮廷にもその波は及んできた。1617 年から 72 年まで宮廷楽長をつとめたハインリヒ・シュッツは、当時まだ木造だったツヴィンガー宮殿のファサードやさまざまな広場、宮殿の広間などを使用してオペラの上演を行うとともに、1627 年には自作のオペラ《ダフネ》をハルテンフェルス城のホールで初演するなどしてドレスデンにおけるオペラの歴史の第一歩を記した。1631 年には三十年戦争の戦禍がドレスデンに及び、39 人の楽員を擁していた名声を誇る宮廷楽団も 10 名編成まで縮小を余儀なくされる。しかし、再建につとめたシュッツの尽力と 65 年に選帝侯に就任したヨハン・ゲオルク 2 世が連れてきた自らの宮廷楽団との併合によって 35 名の編成までに復旧した。

ドレスデンにおける最初のオペラ・ハウスは 1664 年から、67 年にかけてツヴィンガー宮殿の向かいのタッシェンベルクに建設された。ヴォルフ・カスパー・フォン・クレンゲルの設計による劇場は、現在のオペラ・ハウスを大きく上回る 2000 人近くの観客を収容できる大規模なもので、当時の最新鋭の照明、舞台機構を備えていたという。1667 年 1 月 27 の柿落としでは、ボンテンピの《テセウス》が上演された。イタリア最良だった当時の選帝侯ヨハン・ゲオルク 3 世は 1685 年にイタリア・オペラの常設カンパニーを設立し、カルロ・パラヴィチーノを楽長に招いた。

● 「強健王」による新オペラ・ハウス

ヨハン・ゲオルク 3 世、その息子の 4 世の治世下の 1694 年まで、謝肉祭の時期にオペラ上演が続

株式会社ジャパン・アーツ

<http://www.japanarts.co.jp>

〒150-8905 東京都渋谷区渋谷 2-1-6

TEL: 03-3499-8100 / FAX: 03-3499-8102

JAPAN ARTS CORPORATION

<http://www.japanarts.co.jp>

2-1-6, Shibuya Shibuya-ku,

Tokyo JAPAN 150-8905

TEL: 81-3-3499-8091 FAX: 81-3-3499-8092

けられた。その後継者、フリードリヒ・アウグスト 1 世(ポーランド王を兼任し、ポーランド王としてはアウグスト 2 世、いわゆる「強健王」1697-1704、1701-33 在位)、ならびにフリードリヒ・アウグスト 2 世(ポーランド王アウグスト 3 世、1733-63 在位)の時代は、専制君主の多くがそうであったように建築、美術、音楽、演劇といった芸術が覆うに奨励された。フランスの芸術を愛したフリードリヒ・アウグスト 1 世はイタリア・オペラ・カンパニーを解体、それにかえてフランス歌手や俳優が好んで起用される。一方、つづくフリードリヒ・アウグスト 2 世の関心はもっぱらイタリア・オペラに向けられた。

「強健王」の治世のもと 1718 年 9 月 9 日から 1719 年 8 月 25 日という当時としてはまったく異例とも言える短い工期で新しい歌劇場が完成された。ツヴィンガー宮殿に隣接した場所に位置する劇場は、M.D. ペッペルマンの設計、アレッサンドロ・マウロの装飾による 2000 人収容の当時のヨーロッパで最大規模を誇るものであった。1734 年から 1763 年まで楽師長をつとめたヨハン・アドルフ・ハッセによってイタリア・オペラを中心とした壮麗な舞台上演が続けられ、この劇場の上演はヨーロッパ中の評判となった。また、注目すべきは入場料を無料にした時期があったことである。

1756 年から 63 年まで続いた七年戦争でザクセンが敗れ、ザクセン選帝侯が兼任していたポーランド王室とのつながりが途絶え、経済的にも大きな打撃をこうむった。ドレスデンの町もプロイセンの砲撃で大きな被害を受ける。そうしたなか、大劇場における上演は中止を余儀なくされるが、1756 年にモレッティによって建設された劇場を「小宮廷劇場」と命名、オペラ上演が続けられる。イタリアのオペラ・ブッフアとともに、《後宮からの逃走》、《魔笛》といったモーツァルトの作品も上演されている。自ら優れた鍵盤楽器奏者だった当時の選帝侯フリードリヒ・アウグスト 3 世は宮廷での音楽活動の伝統を守り続けることに腐心した。

●ドイツ・オペラの創設、ゼンパー設計によるオペラ・ハウスの開場

ウィーン会議でザクセン王国の存続が決まり、1817 年に宮廷楽団、宮廷劇場の初代総監督官ハインリヒ・フィッツトゥム伯によってドレスデンにドイツ・オペラが創設された。ドイツ・オペラは宮廷が好んだイタリア・オペラの団体と共存する形で上演が進められたが、32 年にイタリア・オペラ団が解散、ドイツ・オペラが主導権を得る。そのドイツ・オペラ部門の楽長をつとめたのがカール・マリア・フォン・ウェーバーである。イタリア・オペラをすべて排除し、ベートーヴェンの《フィデリオ》、自作の《魔弾の射手》、《オイリアンテ》によってドイツ・オペラの礎を築いた。1826 年にウェーバーがロンドンで夭折したことは、ドイツ・オペラの発展にとって大きな痛手であった。1824 年から 26 年まで、ワーグナーの先駆者として知られる作曲家ハインリヒ・マルシュナーが音楽監督をつとめたものの、その影響力は小さかった。カール・ゴットフリート・ライシガーが音楽監督に就任、28 年から楽長、51 年から 59 年までは首席宮廷楽長としてドレスデンのオペラ発展に尽力した。その間の 43 年から 49 年まではリヒャルト・ワーグナーがライシガーとともに楽長をつとめ、オペラ、オーケストラ双方の活動でおおきな足跡を残した。ワーグナーのドレスデンにおける活躍については別項を参照していただきたい。

1838 年に開始されたゴットフリート・ゼンパーの設計による宮廷劇場は、1841 年 4 月 12 日に開場、ウェーバーの祝典序曲、ゲーテの《トルクヴァート・タッソー》によって柿落としされた。1849 年の五月蜂起に加担したワーグナーはドレスデンを離れることを余儀なくされ、カール・アウグスト・クレプスが楽長に就任、60 年にはユーリウス・リーツがその後任者となった。リーツはオペラ、オーケストラの両面で活躍し、1874 年から没する 77 年まで、ドレスデンの初代音楽総監督をつとめた。

株式会社ジャパン・アーツ

<http://www.japanarts.co.jp>

〒150-8905 東京都渋谷区渋谷 2-1-6

TEL: 03-3499-8100 / FAX: 03-3499-8102

JAPAN ARTS CORPORATION

<http://www.japanarts.co.jp>

2-1-6, Shibuya Shibuya-ku,

Tokyo JAPAN 150-8905

TEL: 81-3-3499-8091 FAX: 81-3-3499-8092

●初代ゼンパーオーパーの輝かしき時代へ

1869年の火災で初代のゼンパーオーパーが焼失、木造の仮劇場で活動を続けたが、1878年には同じ設計図に基づいて再建され、1872年よりシュターツカペレの音楽監督、指揮者として活躍していたエルンスト・フォン・シューフが1882年には音楽総監督に昇進、その主導のもとでドレスデンの歌劇場史上、もっとも輝かしい時代を迎える。旧来のレパートリーにおける高水準の上演に加え、9つの初演を含むリヒャルト・シュトラウスのオペラによってゼンパーオーパーの名前を世界にとどろかせた。

リヒャルト・シュトラウスはドレスデンに住んだことはなかったものの、ドレスデンの音楽文化とはきわめて密接なかかわりを持っていた。円熟期の彼のオペラのうち9つもの作品がドレスデン宮廷歌劇場で初演されたという事実がそれを如実に物語っている。その詳細については別項に譲ることとし、ここではシュトラウス晩年のエピソードをご紹介することと定める。ドイツの敗色が誰の眼にも明らかになったシュトラウス80歳の頃、劇場の閉鎖を控え、カール・エルメンドルフらによってシュトラウスのオペラが連続上演された。それに列席したシュトラウスはもう二度とこの地を踏むことがないと予感しただろう。1945年3月13日から4月12日かけて、シュトラウスは弦楽器のための「メタモルフォーゼン」を作曲した。そこで表現されているのは、ゼンパーオーパーをはじめとする自分が深くかかわってきたオペラ・ハウス、さらにはドイツの精神文化を失った悲しみである。シュトラウスは死の直前までドレスデンのオペラ文化の再興を願い続けた。ある手紙の中で、「私は、愛する哀れなドレスデンが、気品あふれるオペラ芸術を再構築しようと真剣に取り組んでいるということをお聞きして大変喜んでいます。私はカール・マリア・フォン・ウェーバーとリヒャルト・ワーグナーによって神聖化されたあの美しい劇場を幾度も思い起こしました。それは忘れもしないシューフによって私の作品が生まれた場所でもあるのです... まだ、以前の歌手たちはいるのでしょうか？ 昔の仲間たちは健在でしょうか？ そしてかの偉大なるオーケストラは無傷なのでしょう吗？」と書き記している。1949年9月8日にシュトラウスがこの世を去り、10月にバイロイト祝祭劇場で追悼演奏会が開催された。ヨーゼフ・カイルベルトが指揮を執り、演奏したのはシュトラウスがこよなく愛したシュターツカペレ・ドレスデンだった。「死と変容」と「メタモルフォーゼン」が会場に響きわたった。

●戦後の復興

シューフの没後、フリッツ・ライナー(1914-21 在任)、フリッツ・ブッシュ(1922-33)、カール・ベーム(1934-42)、カール・エルメンドルフ(1943-44)がその職を受け継ぐ。1944年8月31日の《魔弾の射手》を最後に上演は中断され、1945年2月13日に連合軍の戦略上無意味な空襲によって、ゼンパーオーパーを含むこの美しい都市は灰燼に帰した。しかし、1945年8月20日には焼け残った会場を利用してヨーゼフ・カイルベルト指揮による《フィガロの結婚》が上演されている。オペラとオーケストラの監督を兼任したカイルベルトは50年までその職にとどまり、戦後の歌劇場の復興に尽力した。48年からはかつてのシャウシュピールハウスの場所に建設された州立劇場が歌劇場の本拠となる。シュターツカペレ設立400年を記念するベートーヴェンの《フィデリオ》で開幕。その大劇場(1103席)ばかりでなく、小劇場(525席)も上演会場として使用された。

カイルベルトの後継者としてルドルフ・ケンペ(1950-53 在任)、フランツ・コンヴィチュニー(1953-55)が音楽総監督をつとめ、56年から58年までロヴロ・フォン・マタチッチが首席指揮者を

株式会社ジャパン・アーツ

<http://www.japanarts.co.jp>

〒150-8905 東京都渋谷区渋谷 2-1-6

TEL: 03-3499-8100 / FAX: 03-3499-8102

JAPAN ARTS CORPORATION

<http://www.japanarts.co.jp>

2-1-6, Shibuya Shibuya-ku,

Tokyo JAPAN 150-8905

TEL: 81-3-3499-8091 FAX: 81-3-3499-8092

つとめ、その後、オトマール・スウィトナー(1960-64)、クルト・ザンデルリンク(1964-67)、マルティン・トゥルノフスキー(1967-68)が後任の首席をつとめている。60年代に指揮者に加わったジークフリート・クルツは1971年に音楽総監督に昇進した。75年にはヘルベルト・ブロムシュテットがオペラとオーケストラの首席指揮者となり、1985年までそのポストにあった。一方、演出面ではハリー・クプファーは72年から81年まで、オペラの監督と主任演出家を務めている。

長年の懸案だったゼンパーオーパーの再建については1952年に着手され、1956年までにファサードの修復が完了、再建案について議論が交わされた結果、70年代にはほぼ元のプランどおりの再建が決まった。ただし、客席空間が若干拡張され、元の1600席が1300席に減らされ、客席はゆったりしたものになった。舞台の部分については12メートルの拡張がなされ、舞台装置も当時の最新鋭の機械の導入が決まった。1977年に再建が開始されたゼンパーオーパーは1985年に完成をみた。

●新ゼンパーオーパーの誕生

1985年2月13日、ゼンパーオーパーの美しい外観に再び生命が吹き込まれた。上演された演目はドレスデン縁の作曲家の作品で、戦前、最後に上演された《魔弾の射手》だった。1989年10月18日、モスクワ、ミンスクへの客演から戻ったゼンパーオーパーのメンバーはホーネッカーの失脚を知った。ゼンパーオーパーの新たな時代の始まりである。1991年には、オーケストラはドレスデン国立歌劇場管弦楽団からザクセン州が管理運営するザクセン州立歌劇場のオーケストラ、ザクセン州立シュターツカペレ・ドレスデンと改称された。

1990年1月にクリストフ・アルブレヒトがインテンダントに就任し、1991年にはベルクの《ルル》、ツェムリンスキーの《小人》、ダラピッコラの《囚人たち》といった作品がドレスデン初演されるなど、レパートリーの面でも大きく様変わりした。指揮者ではハンス・フォンク(1985-90)がシュターツカペレの首席指揮者をつとめた後、1992年にジュゼッペ・シノーポリが首席をつとめ、リヒャルト・シュトラウスのオーケストラ作品をはじめとする数多くの名演によってオーケストラの新たな時代の到来を強く印象付けた。しかし、ゼンパーオーパーについては長らくその名声にふさわしい指揮者を得ることができなかったというのが実情だろう。

シノーポリがゼンパーオーパーの音楽総監督に就任が決まっていた2001年4月21日、ベルリン・ドイツオペラで指揮中に倒れ、そのまま急逝したことは、ゼンパーオーパーにとって絶大なる損失だった。2007年9月、オペラとオーケストラを掌握する高い能力を持った指揮者ファビオ・ルイジの音楽総監督就任によって、ゼンパーオーパー、シュターツカペレ・ドレスデンはようやく統一の混乱から抜け出し、大きく羽ばたく環境が整ったといえるだろう。

●ルイジ就任による活性化

2005年10月30日、ドレスデンの悲劇の象徴として瓦礫の山として残されていたかつてのドレスデンのランドマーク、フラウエンキルヒェが再建され、ドレスデンの旧市街は戦前の町並みへと復旧が進んでいる。11月4日にはルイジ指揮、シュターツカペレによって記念演奏会が開催され、ベートーヴェンの「ミサ・ソレムニス」が演奏された。それは日本でも放映され、DVDでも入手できるのでご覧になった方も多いただろう。ルイジとシュターツカペレの相性の良さは録音を通してもしっかりと認識できる。就任に先駆け、2006年6月、9月にゼンパーオーパーで指揮した《ニーベルングの指環》チクルス上演でも成功を収めたルイジの前評判は非常に高い。

ルイジはオーケストラについて、次のように語っている。

株式会社ジャパン・アーツ

<http://www.japanarts.co.jp>

〒150-8905 東京都渋谷区渋谷 2-1-6

TEL: 03-3499-8100 / FAX: 03-3499-8102

JAPAN ARTS CORPORATION

<http://www.japanarts.co.jp>

2-1-6, Shibuya Shibuya-ku,

Tokyo JAPAN 150-8905

TEL: 81-3-3499-8091 FAX: 81-3-3499-8092

「シュターツカペレは世界最高のオーケストラのひとつ。ゼンパーオーパーの魅力の大部分というのはこのオーケストラの力によるものです。おそらくウィーン国立歌劇場に比肩する唯一の存在でしょう。それから私にとって興味深いのはこれから構築していくべきところが多くあること。オーケストラについて言えば、ここ数年間、プログラムがこれまであまりに保守的でした。新しい作曲家の作品についても積極的に取り入れていきたい。新作委嘱も行います。初年度はドイツのイザベル・ムンドリ、次年度はオーストリアのベルンハルト・ラングにレジデント・コンポーザーをとめてもらいます。」

こうした新しい作品への取り組みがオーケストラを活性化し、しいてはオペラ上演の水準の向上につながるの間違いはない。歌劇場の歌手の起用については、ドレスデンではアンサンブル・システムが堅持されている。「スター・システムを排し、高水準のアンサンブルを構築しているところが大きな特徴。同じカンパニーに属す、という意識を共有している。それがともに音楽を作り出す際に大きな力を発揮します。」と語る。

この9月2日、日本公演でも上演される《サロメ》で音楽総監督としての初仕事を終え、9日にはイザベル・ムンドリの新作「バランセン」、ベルクの「初期の7つの歌」、そしてリヒャルト・シュトラウスの交響詩「英雄の生涯」の初演版で就任披露を行った。このプログラミングにもルイジの考えは明確に反映されている。そして、10月14日にはワーグナーの大作《ニュルンベルクのマイスタージンガー》の新演出を指揮してその力量を問う。

2003年以来、インテンダントをつとめるゲルト・ユッカー教授は、ザクセン州の財政状態が決して良好とは言えず、州が運営するゼンパーオーパーの経営に影を投げかけていることを危惧しながらも、ルイジの就任による新時代のこの歌劇場にきわめて大きな期待を寄せている。ルイジ時代初の大プロジェクトとなる日本ツアーにかかる期待はきわめて大きい。シュターツカペレ・ドレスデンというドイツが誇る至宝、そしてゼンパーオーパーの名アンサンブルにさらなる磨きをかけて公演に臨む。

*プロフィールの一部を使用する場合、日数が経過している場合は、ジャパン・アーツの校正チェックをお受け頂きますようお願い申し上げます。

株式会社ジャパン・アーツ

<http://www.japanarts.co.jp>

〒150-8905 東京都渋谷区渋谷 2-1-6

TEL: 03-3499-8100 / FAX: 03-3499-8102

JAPAN ARTS CORPORATION

<http://www.japanarts.co.jp>

2-1-6, Shibuya Shibuya-ku,

Tokyo JAPAN 150-8905

TEL: 81-3-3499-8091 FAX: 81-3-3499-8092

Sächsische Staatsoper Dresden

Semperoper

The Metropolitan Opera, now in its 127th season, is a vibrant home for the most creative and talented artists, including singers, conductors, composers, orchestra musicians, stage directors, designers, visual artists, choreographers, and dancers from around the world. Known as the venue for the world's greatest voices, the Met has been under the musical direction of James Levine since 1976. Maestro Levine is credited with having created one of opera's finest orchestras and choruses.

In the summer of 2006, Peter Gelb became the Met's 16th General Manager. Under the leadership of Gelb and Levine, the Met has been elevating the company's theatrical standards by significantly increasing the number of new productions, staged by the most imaginative directors working in theater and opera. The company is also securing increased commitments from the world's greatest singers. The Met has launched a series of initiatives to broaden its audience internationally; efforts have ranged from transmitting operas live in high definition to movie theaters around the world to hosting free Open Houses for the general public. To revitalize the company's repertory, the Met has pledged to present modern masterpieces alongside the classic repertory.

The Metropolitan Opera was founded in 1883, with its first opera house built on Broadway and 39th Street by a group of wealthy businessmen who wanted their own theater. In the company's early years, the management changed course several times, first performing everything in Italian (even *Carmen* and *Lohengrin*), then everything in German (even *Aida* and *Faust*), before finally settling into a policy of performing most works in their original language, with some notable exceptions.

The Metropolitan Opera has always engaged many of the world's most important artists. Christine Nilsson and Marcella Sembrich shared leading roles during the opening season. In the German seasons that followed, Lilli Lehmann dominated the Wagnerian repertory and anything else she chose to sing. In the 1890s, Nellie Melba and Emma Calvé shared the spotlight with the De Reszke brothers, Jean and Edouard, and two American sopranos, Emma Eames and Lillian Nordica. Enrico Caruso arrived in 1903, and by the time of his death 18 years later had sung more performances with the Met than with all the world's other opera companies combined. American singers acquired even greater prominence with Geraldine Farrar and Rosa Ponselle becoming important members of the company. In the 1920s, Lawrence Tibbett became the first in a distinguished line of American baritones for whom the Met was home. Today, the Met continues to present the best available talent from around the world and also discovers and trains artists through its National Council Auditions and Lindemann Young Artist Development Program.

株式会社ジャパン・アーツ

<http://www.japanarts.co.jp>

〒150-8905 東京都渋谷区渋谷 2-1-6

TEL: 03-3499-8100 / FAX: 03-3499-8102

JAPAN ARTS CORPORATION

<http://www.japanarts.co.jp>

2-1-6, Shibuya Shibuya-ku,

Tokyo JAPAN 150-8905

TEL: 81-3-3499-8091 FAX: 81-3-3499-8092

Almost from the beginning, it was clear that the opera house on 39th Street did not have adequate stage facilities. However, it was not until the Metropolitan Opera joined with other New York institutions in forming Lincoln Center for the Performing Arts that a new home became possible. The new Metropolitan Opera House, which opened at Lincoln Center in September of 1966, was equipped with the finest technical facilities.

Many great conductors have helped shape the Met, beginning with Wagner's disciple Anton Seidl in the 1880s and 1890s and Arturo Toscanini who made his debut in 1908. There were two seasons with both Toscanini and Gustav Mahler on the conducting roster. Later, Artur Bodanzky, Bruno Walter, George Szell, Fritz Reiner, and Dimitri Mitropoulos contributed powerful musical direction. James Levine made his debut in 1971, celebrating his 40th anniversary in the 2010-11 season, and has been Music Director since 1976. (He held the title of Artistic Director between 1986 and 2004.)

The Met has given the U.S. premieres of some of the most important operas in the repertory. Among Wagner's works, *Die Meistersinger von Nürnberg*, *Das Rheingold*, *Siegfried*, *Götterdämmerung*, *Tristan und Isolde*, and *Parsifal* were first performed in this country by the Met. Other American premieres have included *Boris Godunov*, *Der Rosenkavalier*, *Turandot*, *Simon Boccanegra*, and *Arabella*. The Met's 31 world premieres include Puccini's *La Fanciulla del West* and *Il Trittico*, Humperdinck's *Königskinder*, and five recent works: John Corigliano and William Hoffman's *The Ghosts of Versailles* (1991), Philip Glass's *The Voyage* (1992), John Harbison's *The Great Gatsby* (1999), Tobias Picker's *An American Tragedy* (2005), and Tan Dun's *The First Emperor* (2006). An additional 37 operas have had their Met premieres since 1976.

Hänsel und Gretel was the first complete opera broadcast from the Met on Christmas Day 1931. Regular Saturday afternoon live broadcasts quickly made the Met a permanent presence in communities throughout the United States and Canada.

In 1977, the Met began a regular series of televised productions with a performance of *La Bohème*, viewed by more than four million people on public television. Over the following decades, more than 70 complete Met performances have been made available to a huge audience around the world. Many of these performances have been issued on video, laserdisc, and DVD.

In 1995, the Met introduced Met Titles, a unique system of simultaneous translation. Met Titles appear on individual screens mounted on the back of each row of seats, for those members of the audience who wish to utilize them, but with minimum distraction for those who do not. Titles are provided for all Met performances in English, Spanish, and German.

Each season the Met stages more than 200 opera performances in New York. More than 800,000 people attend the performances in the opera house during the season, and millions more experience the Met through new media distribution initiatives and state-of-the-art technology.

株式会社ジャパン・アーツ

<http://www.japanarts.co.jp>

〒150-8905 東京都渋谷区渋谷 2-1-6

TEL: 03-3499-8100 / FAX: 03-3499-8102

JAPAN ARTS CORPORATION

<http://www.japanarts.co.jp>

2-1-6, Shibuya Shibuya-ku,

Tokyo JAPAN 150-8905

TEL: 81-3-3499-8091 FAX: 81-3-3499-8092

The Met continues its hugely successful radio broadcast series?now in its 80th year?the longest-running classical music series in American broadcast history. It is heard around the world on the Toll Brothers-Metropolitan Opera International Radio Network.

In December 2006, the company launched *The Met: Live in HD*, a series of performance transmissions shown live in high definition in movie theaters around the world. The series expanded from an initial six transmissions to 12 in the 2010?11 season and today reaches over 1,500 venues in 46 countries. The Live in HD performances are later also shown on public television, and a number of them have been released on DVD. In partnership with the New York City Department of Education and the Metropolitan Opera Guild, the Met has developed a nationwide program for students to attend Live in HD transmissions for free in their schools.

Other media offerings include Metropolitan Opera Radio on SIRIUS XM Satellite Radio, a subscription-based audio service broadcasting both live and historical performances, commercial-free and round the clock. Met Player, a subscription-based online streaming service available at metplayer.org, was launched in November 2008. It offers more than 300 Met performances, including Live in HD productions, classic telecasts, and archival broadcast recordings, for high-quality viewing and listening on your computer. The Met also provides audio recordings on demand through an online partnership with Rhapsody, and free live audio streaming of performances on its website once every week during the opera season.

In 2006, the Met launched a groundbreaking commissioning program in partnership with New York's Lincoln Center Theater, which provides renowned composers and playwrights with the resources to create and develop new works at the Met and at Lincoln Center's Vivian Beaumont Theater.

Other initiatives include the Arnold and Marie Schwartz Gallery Met, which displays the work of top contemporary visual artists; annual holiday entertainment offerings; a Rush Ticket Program offering discounted orchestra seats for \$20 on weekdays and \$25 on weekends; expanded editorial offerings in Met publications, on the web, and through broadcasts; and new public programs that provide greater access to the Met, including a series of Open House dress rehearsals, which are free to the public.

(December 2010) *The Teatro Regio*
in History and on Stage

Established in 1740 as the theatre of the Savoy court, the activities of the Teatro Regio have never been interrupted, even during Napoleonic domination, was of independence and national unification, with the end of the 1800s seeing a period of great prestige in the presence of Arturo Toscanini and world premiers of two masterpieces of Giacomo Puccini: *Manon Lescaut* and *La Bohème*.

株式会社ジャパン・アーツ
<http://www.japanarts.co.jp>
〒150-8905 東京都渋谷区渋谷 2-1-6
TEL: 03-3499-8100 / FAX: 03-3499-8102

JAPAN ARTS CORPORATION
<http://www.japanarts.co.jp>
2-1-6, Shibuya Shibuya-ku,
Tokyo JAPAN 150-8905
TEL: 81-3-3499-8091 FAX: 81-3-3499-8092

In 1936, a fire destroyed the old Theatre. Rebuilt by Carlo Mollino, it was inaugurated in 1973 with / Vespri Siciliani directed by Maria Callas. The new Teatro Regio is characterised by an exclusive curvilinear design, and is equipped with one of the largest stages in Europe and advanced technology for the staging of particularly complex productions.

From the artistic point of view, the Teatreo Regio today combines the traditional opera repertoire with innovative opera theatre, making use of such prestigious names in direction as Luca Ronconi, Robert Carsen, Hugo de Ana, Jonathan Miller and Graham Vick, on occasion involving great names in cinema, like Ettore Scola, Ermanno Olmi, William Friedkin and Jean Reno. In addition, there are regular guest appearances by the world's most important ballet companies, from the Royal Ballet of London to the Bolshoi Ballet of Moscow and the Kirov Ballet of Mariinsky Theatre of St. Petersburg. The thrilling adventure of the XX Olympic Winter Games took place in 2006, with Turin in the spotlight of the mass media of the whole world: in the span of two weeks the Regio put on no less than four operas - of which three new productions and two world premieres - for a total of 24 performances.

With a staff of 380 people and an annual budget of 45 million euros, the Regio constitutes the most important productive and organizational cultural centre of the region. The primary commitment of the Theatre is the Opera and Ballet Season, which is combined with a program of symphony concerts, the season of contemporary musical theatre of the Piccolo Regio Laboratorio and a full program of activities for the schools that involves more than 50,000 young people every year.

In recent years the production output of the Theatre has increased considerably in terms of both quantity and quality, ensuring the Regio its undisputed role in the foreground of the international artistic scene. This is demonstrated by the many co-productions with major European institutions and its record audiences of more than 225,000 paying members of the public each year and more than 13,000 season ticket holders, the largest figure of any Italian opera house. Music Director (from summer 2007) Fabio Luisi

Conductor Laureate Sir Colin Davis

The Staatskapelle Dresden celebrated its 450th anniversary on the 22nd of September 1998. Founded in 1548 by Prince Moritz von Sachsen the ensemble is one of the oldest orchestras in the world, enjoying a wealth of tradition. In fact the Staatskapelle is unique in having maintained its position as one of the leading ensembles over the past four and a half centuries, throughout various musical epochs.

Outstanding Kapellmeisters and internationally recognised instrumentalists have helped to shape the Staatskapelle Dresden since its foundation as a Court Orchestra. Directors have included Heinrich Schütz, Carl Maria von Weber, Richard Wagner and Ernst von Schuch. Prominent names from the 20th Century include Fritz Reiner, Fritz Busch, Karl Böhm, Joseph Keilberth, Rudolf

株式会社ジャパン・アーツ

<http://www.japanarts.co.jp>

〒150-8905 東京都渋谷区渋谷 2-1-6

TEL: 03-3499-8100 / FAX: 03-3499-8102

JAPAN ARTS CORPORATION

<http://www.japanarts.co.jp>

2-1-6, Shibuya Shibuya-ku,

Tokyo JAPAN 150-8905

TEL: 81-3-3499-8091 FAX: 81-3-3499-8092

Kempe, Otmar Suitner, Kurt Sanderling and Herbert Blomstedt. Guisepppe Sinopoli was Principal Conductor from 1992 until 2001, followed by Bernard Haitink from 2002 until 2004. The Conductor Laureate is Sir Colin Davis. In the summer of 2007 Fabio Luisi will assume the position of Music Director of the Sächsische Staatsoper and the Staatskapelle Dresden.

Richard Strauss had close links to the orchestra for over 60 years. Nine of his operas were premiered in Dresden (including “Salome”, “Elektra” and “Der Rosenkavalier”) while he dedicated the “Alpine Symphony” to the Dresden “Kapelle”. In fact the Staatskapelle retains its international reputation as the “Strauss Orchestra” up to the present day. Many other composers have written works which were either dedicated to the orchestra or first performed in Dresden, including Vivaldi, Wagner, Schumann, Liszt, Hindemith, Weill, and more recently, Matthus, U. Zimmermann, Kantscheli, Ruzicka and Rihm.

The official appointment of Fabio Luisi will also see the introduction of an annual “Capell compositeur” (Composer-in-residence), chosen by the Staatskapelle to ensure the continuation of the Orchestra’s long tradition of premiering works. In the season 2007/2008 this will be the German composer Isabel Mundry.

The leading conductors of all ages have performed with the Staatskapelle Dresden; famous guest conductors of the last 50 years have included Karajan, C. Kleiber, Sawallisch, Prêtre, Harnoncourt, Ozawa, Levine, Mehta, Maazel, Eschenbach, Chung, Salonen, Thielemann, Gatti and Harding.

The Staatskapelle Dresden has been an opera orchestra since the second third of the 17th century. Today the ensemble performs daily in the Semperoper with a diverse repertoire ranging from Baroque to the latest contemporary works. The Staatskapelle began giving public concerts at the end of the 18th century; subscription concerts were introduced in 1858. Numerous recordings from the 1920s confirm the extraordinary position of the ensemble as an opera and concert orchestra. A busy touring schedule regularly brings the Staatskapelle to the world’s leading centres of music.

April 2007

2015/16 season only. Please contact Japan Arts if you wish to edit this biography.